

## 天皇と富士山

〈静岡県富士山世界遺産センター 学芸課 教授 松島 仁〉

6月18日から7月2日まで、早稲田大学構内において、「富士狂アイランド」という企画展を開催した。私が分担者をつとめる科学研究費助成事業「富士山とナショナリズム」(代表:須藤遥子 摂南大学教授)の研究成果を可視化した展覧会であり、このなかで私は、明治から昭和戦前期までの天皇と富士山をめぐる視覚イメージを分析した。

天皇と富士山を合わせ描くイメージは、明治元年(1868)東京行幸—東幸ぎょうこう とうこうに取材した一連の錦絵いへに端を発するが、それらは概ね14代将軍徳川家茂いえもちによる上洛や第二次長洲征討に際する西上さいじょう(文久3年<1863>・慶応元年<1865>)を描いた錦絵群の構成を踏襲する。

明治22年には大日本帝国憲法が制定されるとともに、嘉仁親王よしひと(のちの大正天皇)の立太子の礼が行われ、日本は立憲君主制による国民国家としての体裁を整備する。その過程で徳川将軍権力のメタファーで、都市江戸のアイコンでもあった富士山は、〈国民〉統合のためのシンボルとして読みかえられていく。こうしたなか、観兵式や皇居前広場における国家的ページェントを描いたイメージには、天皇の身体と一体化するように、富士山が描き添えられた。近代天皇の身体とイデオロギーを可視的に媒介し、物質化する装置としての機能を、富士山は担っているのだ。

明治21年の梅堂国政画「青山練兵場観兵式ノ図」では、白馬に乗った明治天皇が白妙の富士に重ねられる。騎馬姿の天皇とともに菊紋の天皇旗を掲げる武官、富士山を配する構図は、天皇観兵式の図様として定型化される。これら観兵式の定型構図は、新興メディアの石版画、そして郵便というシステムに乗り帝国の内外を巡回する絵葉書においても再生産される。

日露戦争の勝利を祝賀する凱旋観兵式を描いた上條與茂太郎画よもたろう「凱旋記念大観兵式御臨幸第一公式鹵簿之図ろぼ」では、二重橋越しの富士山を背景にページェントを繰り広げる天皇を描いた、すでに定型化した構図を継承しながら、明治期に神格化される“忠臣”楠正成像や、桜花咲き乱れるなか奉祝旗を掲げ歓喜する〈国民〉の姿を上書きする。それは欧州列強に対する勝利を得た明治日本の理想的な国家像を視覚化した“明治曼荼羅”ともいべきイメージである。

以上のように、「富士狂アイランド」展では、近代日本を構築する“文化的記憶”としての天皇と富士山によるイメージ連合について考察してみたが、10月3日から当センターで開催する特別展「富士山から読みとく〈日本〉のかたち」では、この側面をさらに彫琢ちやうたくし、〈紀元二千六百年〉(1940年)を契機に横山大観や岡田紅陽により制作された、環境描写を排しつつ孤高の富士山をクローズアップすることにより、天皇の「神聖不可侵」性(大日本帝国憲法第3条)を可視化した作品も展示し、“政治的図像”としての富士山について考察する。



梅堂国政画「青山練兵場觀兵式ノ図」 1888年 架蔵



上條與茂太郎画「凱旋紀念大觀兵式御臨幸第一公式鹵簿之図」 1906年 架蔵

